

中耳疾患とめまい・平衡障害

白戸耳鼻咽喉科めまいクリニック

白戸 勝

Vertigo and Dizziness due to Middle Ear Disorders

Masaru Shirato

Shirato ENT Clinic (Hakodate)

はじめに

急性中耳炎、滲出性中耳炎あるいは慢性中耳炎などの中耳疾患は日常遭遇する機会の多い疾患である。しかし、こと「めまい」との関連でみると軽視されがちな傾向にあることも否めない。しかし実地臨床上、あらゆる中耳疾患はめまい予備軍であるとの疑いをもって診療にあたれば、めまいを起こす中耳疾患は思った以上に多いのではなかろうかと考えられる。本報告では過去9年間にわたって当科を受診しためまい症例から中耳疾患が原因と考えられる症例を検討した。

対象と方法

1) 対象症例

平成5年1月から平成13年12月までの9年間に当院を受診しためまい患者を対象とした。この間にめまいを訴えて当院を初診しためまい患者は3,898例で、今回対象とした中耳疾患によるめまい新患数は148例であった。これは全めまい新患数の3.8%であり、末梢疾患3,006例の4.9%であった。

2) 疾患内訳

対象となった疾患の内訳は表1の如くであった。慢性化膿性中耳炎が最多で27%であり、中耳炎後遺症21%、乾燥性鼓膜穿孔15%と続いた。耳管狭窄症、滲出性中耳炎、急性中耳炎によるめまい症例もみられた。全体では活動性炎症56%、中耳炎の後遺障害と考えられたもの44%であった。

表1 中耳疾患分類

1. 活動性炎症	
● 耳管狭窄症	5%
● 滲出性中耳炎	8%
● 急性中耳炎	6%
● 慢性化膿性中耳炎	27%
● 真珠腫性中耳炎	10%
2. 後遺障害	
● 乾燥性穿孔	15%
● 中耳炎術後	8%
● 中耳炎後遺症	21%

結 果

1) 年齢分布

対象症例 148 例のうち男性は 57 例、女性は 91 例であった。図 1 に活動性炎症と後遺障害によるめまいの年齢分布を示した。どちらも 60 歳台にピークをもつもので一般のめまい疾患と大差はないが、活動性炎症、とくに急性中耳炎や滲出性中耳炎によるものは若年層にもみられた。最年少は 6 歳の滲出性中耳炎症例であった。7 歳、8 歳の急性中耳炎症例もみられた。

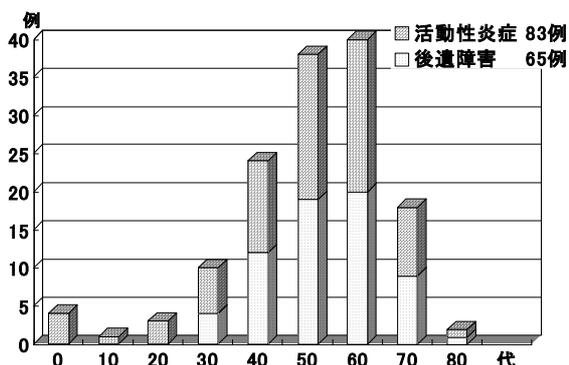


図1 年齢分布

2) めまいの自覚症状

自覚的なめまい感を問診から聞き出し、浮動性めまい（フワフワ・クラクラしたりするもの）、動揺性めまい（グラグラしたり、歩行時ふらつくもの）、回転性めまいの三つに大別した。活動性炎症、後遺障害のあいだに大差はみられず回転性めまいが 57～58% であったが、動揺性めまい、浮動性めまいも少なからずみられた（図 2）。各疾患別にみると耳管狭窄症で浮動性めまいが多く、次いで急性中耳炎例で浮動性めまいがやや多い傾向にあった（図 3）。

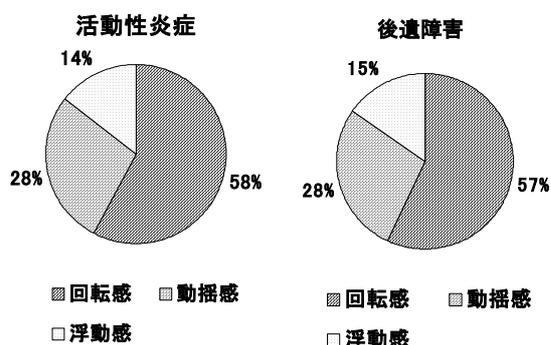


図2 めまいの自覚症状

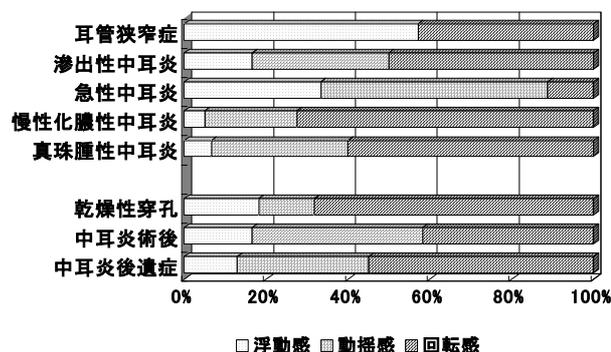


図3 疾患とめまい感

3) 疾患と難聴程度

疾患別の難聴程度を図 4 に示した。耳管狭窄症、次いで滲出性中耳炎に軽度までの難聴が多かった。急性中耳炎で中等度～高度難聴が比較的多いのは内耳炎を併発したと考えられた症例であった。他の疾患では中等度以上の難聴を示す例が圧倒的に多かった。

4) 疾患と骨導聴力低下

骨導聴力の低下をみると（図 5）、耳管狭窄症を除いた疾患に骨導聴力の低下を認めた。滲出性中耳炎でも 42% に、急性中耳炎でも 90% 弱に骨導聴力の低下を認めた。他の疾患でも同様に約 90% に骨導聴力の低下を認めた。

5) 疾患と眼振方向

めまい時にみられる眼振の方向をみることはその病態が刺激的な状態にあるのか麻痺的な状態（機能低下）にあるのかを考える上で重要である。図 6 に概要を示した。耳管狭窄症では健側向き眼振を認めた例が 86% であった。急性中耳炎では患側向き眼振を認めた例

が 78% で対照的であった。その他の疾患では大差なく、平均すると 60% 弱が健側向き眼振であった。なお、瘻孔症状がみられたのは真珠腫性中耳炎 15 例中 8 例、慢性化膿性中耳炎 40 例中 1 例、中耳炎術後 12 例中 3 例であった。

6) 疾患と反復性

めまい発作が単発性か反復性かを検討した。図 7 にその結果を示した。耳管狭窄症は全例単発性であった。急性中耳炎によるめまいも大部分単発性であった。滲出性中耳炎は約半数が反復性であった。他の疾患はめまいを反復する例が多かった。

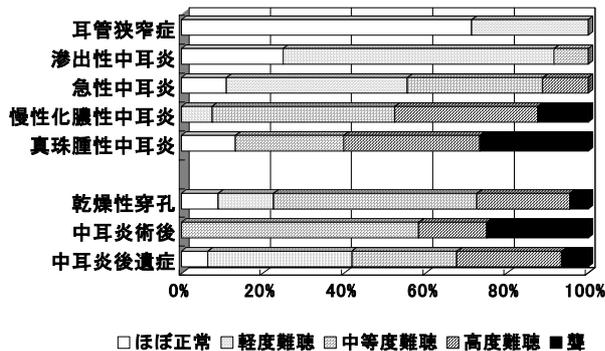


図4 疾患と難聴程度

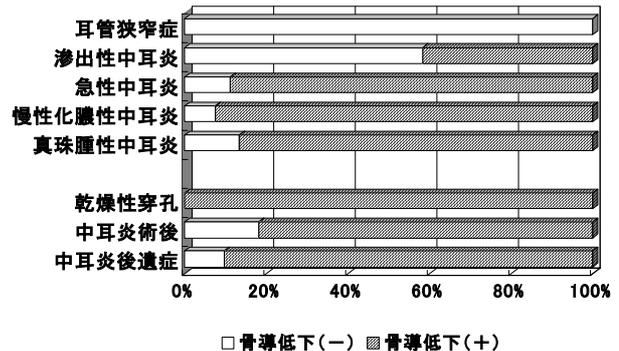


図5 疾患と骨導聴力低下

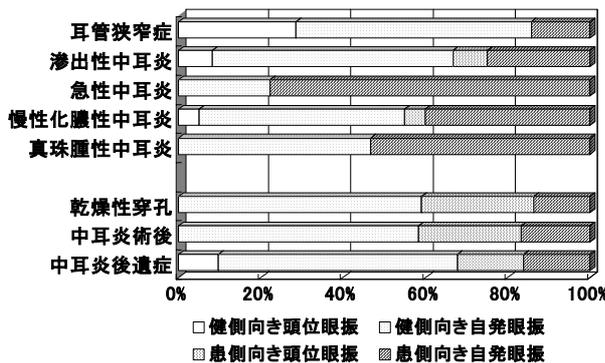


図6 疾患と眼振方向

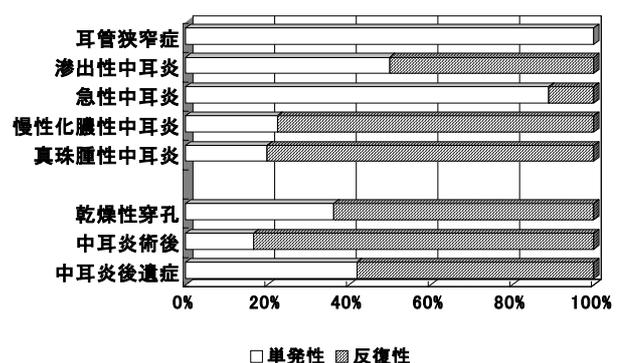


図7 疾患と反復性

考 案

急性中耳炎、滲出性中耳炎あるいは慢性中耳炎をはじめとする中耳疾患は日常遭遇する機会の多い疾患である。しかし、ことめまいとの関連でみると軽視されがちな傾向にあることも否めない。しかし検査を精密にすれば一般に考えられているよりもその頻度は高いと考えられる。

図 8 は福田¹⁾が耳管狭窄症例において遮眼書字による偏書が、通気後に正常化した例を示している。これは耳管狭窄症に限

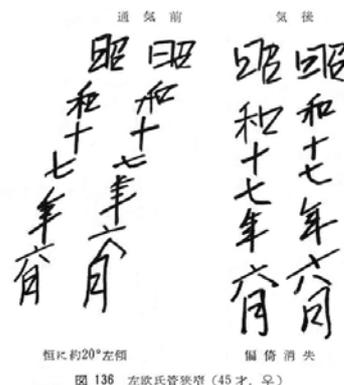


図8 福田 精:「運動と平衡の反射生理」より

らず、急性中耳炎や滲出性中耳炎あるいは外耳道の気圧変化でも認められるという。勿論これらの例はめまいを自覚している例ではない。このような軽微な中耳疾患であっても前庭迷路に影響を及ぼし、潜在性の迷路機能の不均衡を呈していることを明らかにした。いかなる軽度の中耳疾患であっても眼振準備状態にあり、めまい予備軍であると言える。

一方、今村ら²⁾、黒木ら³⁾は慢性中耳炎の罹患年数が長くなるに従って、難聴の型が伝音性難聴から次第に混合性難聴になっていくことを報告した。また、加納ら⁴⁾は慢性中耳炎のため鼓室形成術を行った 201 例について、その術前のENG検査の結果を分析すると、健常者と比べて明らかに高頻度に眼振が認められるという。これらの報告は、たとえめまいを自覚しなくても中耳の炎症が内耳に及んでいる例が多いことを示している。

慢性中耳炎全体では、めまいを訴える頻度はほぼ 30%前後という報告が多い⁵⁾⁶⁾。慢性化膿性中耳炎と真珠腫性中耳炎との比較では真珠腫性中耳炎にめまいを訴える例が多い。めまいの有無と骨導閾値の上昇の有無に有意差があるという報告⁴⁾、ENGでの眼振の出現頻度は 67%や 54%という報告がある⁴⁾⁶⁾。真珠腫性中耳炎に限ると眼振出現率はさらに高くなる。

中耳の炎症は、二つの内耳窓（正円窓あるいは卵円窓）を経由するか、真珠腫性中耳炎によって破壊された内耳骨包（迷路瘻孔）を通して内耳に波及する。しかし、中耳疾患によるめまいはこのような直接的な炎症波及による内耳障害ばかりではなく表 2 に示すような様々な病態が言われている。

めまいを訴える患者に中耳炎が存在していたり、以前に中耳炎罹患を思わせる鼓膜所見、聴力検査所見、X線検査所見などが得られた場合、まず第一に中耳炎からの内耳障害の可能性を疑って検索を進めるべきである。

表2 めまい・平衡障害の病態

1. 急性びまん性化膿性内耳炎
2. 急性びまん性漿液性内耳炎
3. 迷路瘻孔(限局性内耳炎)
4. 内リンパ水腫
5. 中・内耳の圧平衡の変化
6. 中耳炎後遺症としての内耳障害

ま と め

過去 9 年間に当院を受診した中耳疾患に起因するめまい症例 148 例について報告した。

- 1) 疾患頻度は末梢前庭障害のなかで第 4 位（約 5%）であった。
- 2) 内訳は慢性化膿性中耳炎が最多であったが、耳管狭窄症、滲出性中耳炎、急性中耳炎によるものもあった。
- 3) 慢性疾患では中等度以上の難聴を示す例が多かった。
- 4) 耳管狭窄症・滲出性中耳炎を除き、骨導聴力低下を示す例が多かった。
- 5) 耳管狭窄症・急性中耳炎を除き、めまいを反復する例が多かった。
- 6) 中耳炎やその後遺症的所見がある場合、まずめまいの第一の原因と考えて検索すべきと考えられた。

文 献

- 1) 福田 精：遮眼書字法．運動と平衡の反射生理，pp128-138．医学書院，1957．

- 2) 今村信秀ほか：慢性中耳炎における骨導聴力. *Audiology Japan* , 37 : 555-556, 1994.
- 3) 黒木岳人ほか：慢性中耳炎における感音難聴の検討. *耳鼻臨床*, 補 62 : 91-95, 1993.
- 4) 加納有二ほか：慢性中耳炎症例の術前 ENG の検討. *Equilibrium Res*, 39:43-48, 1980.
- 5) 児玉 章ほか：中耳炎手術による自覚症の改善について－慢性中耳炎にみられる慢性の内耳刺激状態に関連して－. *耳喉*, 48 : 149-153, 1976.
- 6) 窪 斐子：中耳手術患者の術前、術後における ENG 検査成績. *日耳鼻*, 72 : 1695-1720, 1969.